

54 【やんから】

うんこをするとき、めまいをすることがおおくなりました。

「痔（じ）じゃろ、心配いらん」

と母親はいうが、ただのめまいではない。

頭のうしろが、ひっぱられるかんじ、もっていかれるかんじがある。

それに、痔くらいで、めまいのするぼくではない。

うるさくいうと、

「お医者さんさ、いけ」

あっちを指差します。

あっちは、懐爺の祠の方角です。

「いくいく、いくよ」

ぼくは懐爺のところに行きました。

「よくきましたね、金ちゃん」

懐爺はあたたかくむかえてくれました。

「おかんは、じ、じ、じ、いうた」

「それは【やんから】でしょう。わたしも金ちゃんの年ごろには、【やんから】にずいぶんまわりつかれましたよ」

「まさか、おばけじゃなからう」

「そのまさかです」

「やっばし、まさかかあ」

「【やんから】の、やん、とは、やんごとなき国とか、あの世、つまり宇宙の果て、のことです。おおむかしら、この地球に棲みつき、現世、未来永劫（みらいえいごう）までつづく、おばけのせかいですが、しかし未来から、わざわざやってきた、おばけもいるのです」

「おせっかいな、おばけじゃのう」

「おばけは、みんな、おせっかいなものです」

ふたりして、苦笑いをしました。

「やん、はわかったぞい。から、はなんじゃ」

「やんから、やってきたから、から、です」

「なんじゃ、その、から、かい。わしは、からっぽの、から、かと、おもったぞい」

「【やんから】は、これから立派なおとなになっていく、少年、青年にたいて、人生のむなしさ、金ちゃんの言葉を借りると、からっぽ、そのことをおしえるために、未来からやってきたおばけなのです。そのまま、頭のうしろをもっていかれて、そのままいきっぱなしになった、こどももいっぱいいます」

「むなしさ、のう。むなしさ、とは、なんじゃろか。からっぽとは、ちがうじゃろ」

ぼくは、からっぽの腹をたたきました。

「ゆくかわの、ながれは、たえずして、しかも、もとのみずにあらず、よどみにうかぶ、うたかたは、かつきえかつむすびて、ひさしくとどまりたるためしなし。むなしさとは、そういうものですよ」

「そんなことは、わしらだって、わかっとるよ。かわに、ささぶねをながすと、かえってこんからのう」

「そうですそうです。それが人生、それが笹舟。人生の笹舟です」

なぜか、懐爺の顔が、とてもさびしそうにみえました。

おもいすごしならいいけれど、懐爺の顔が、とてもさびしそうにみえたということは、きっと、ぼくの顔がさびしそう、ということです。

これというたしかな理由もなく、不安感がわいてきました。

「じんせいのささぶね、のう」

よくわからないが、まあいいか、とおもわれました。

ただ、何となく、ひとつだけ、わかった気がしました。

おばけは、みんな、むなし。人間も、みんな、むなし。